

私の証し-I 思い出の花 “サンパギータ”

「証し」と言えば、何か固い感じがするので
先ず、花の話題から始めることにする。
“サンパギータ”という花の名前をお聞きに
なったことがあるでしょうか？
この花はフィリピン(Philippines)の国花で
日本に例えると、桜に相当する。
可憐な白い小さな花で、清楚な香りがする。
花を摘んで糸を通しレイやブレスレッドにする。
英名ではArabian Jasmine と言う。



フィリピンの国花 サンパギータ

フィリピンは東アジアにおける最大のクリスチャンの国あると言われる。

この多くはカトリック系で、関^{せき} 緑^{みどり} 薯『世界の花の旅』より引用して紹介すると、“サンパギータ”は礼拝に欠かせない花であり、聖日には教会の近くでは多くの花売りで賑わう。

聖像にこの花のレイを掛け、ひざまずき祈り又、持ち帰って家の祭壇に飾るのだそうだ。

私の父はこの国で亡くなった。私が初めてこの国を訪れたのは、かれこれ28年前になる。

この時、ホテルの部屋にそっと置かれていた、この花のブレスレッド、まるで香水をふりまいたようなサンパギータの花の芳香が辺り一面に満ちていた。

この花の原産は文字通りのアラビア半島辺りであると言われていることから、聖書に登場する香油もあるいはこの花が原料だったのかも知れない……と想いを巡らせる。

私とキリスト教との関わりは、マニラ市内のある教会だった。

そこには有名なバンブーオルガン(竹で作られたパイプオルガン)が、あるとの事なので見に行ったことがある。ここが生まれて初めて、私がキリスト教の教会へ足を入れたところとなった。

内部には長椅子を並べ、床は土間で、外の暑いのに比べ、ひんやりと涼しく、(平日だったので)静寂で安らぎのあるところだった。

私たちは、数人のグループによる観光で、ここを訪ねたので、ワイワイガヤガヤとにぎやかに、浮かれています、少なくとも厳粛な気持ちではなかった。

この中にひとりの白い衣を着た人がいた。

私は教会に関する知識は何も持っていなかったが、その人が何をしているのかは直ぐに判った。

ほぼ中央に前向きに座り、教会の後側より入った私たち数人の物音にも、振向きも、身じろぎもせず何か一心に祈っておられた。

最初、私が注目したのは、その人の着衣で、洋服のように縫い合わせをしていない、大きな一枚の布で体を包み、まるで古代の絵から抜け出て来たようなスタイルだった。

この日は閑散としていたから、特別な行事でもなく、その後も、何度かこの国を訪れ、本やテレビ等も関心を持って見てきたが、このような(民族?)衣装は、それ以来見かけた事はない。

今でもこの情景を、記憶の中から鮮明に思い出すことが出来る。

何か一心に祈っておられたのは、主が私の前に現れ、罪多き私のことをあわれみ、将来救に預かるようにと、祈って下さっていた姿であったかも知れない。

私がクリスチャンとして導かれる出発点は、その時『私は主にお出会いました。』と確信している。

言葉の問題

私にとって、初の海外旅行……この国に未だ、戒厳令がひかれていた頃のことであった。

それ迄の私の視野が狭かったので、多くの面で、カルチャー・ショックを受けた。

PHILIPPINES は7000以上の島から成り立っている国家で、タガログ語という言語があるが公式には英語を使っている。

よほど南のミンダナオ島の方から、来た人は別にしても多くの人バイリンガルなのである。

(このようなことは、他の国でも多い) 情けないが、そんなことは海外へ出て初めて分った。

「井の中の蛙、大海を知らず」の通りである。

私どもの小企業でさえも、今や海外とのビジネスもやらざるを得ない時代になり、チャンスさえあれば、生き残るためには、尻込みなんかしてはおられないのである。

このためには否応なく、英語でやり取りしなければならず、以前はこのような事態になることは、予想もしていなかったので、大変苦勞する。

若い頃、広い世間に目を向ける余裕、海外での暮らしや、ホーム・ステイ等の経験や機会があつて、もっと勉強をしていたら、もっとスマートな生き方があつたかも知れない……。

墓地(宗教)の件

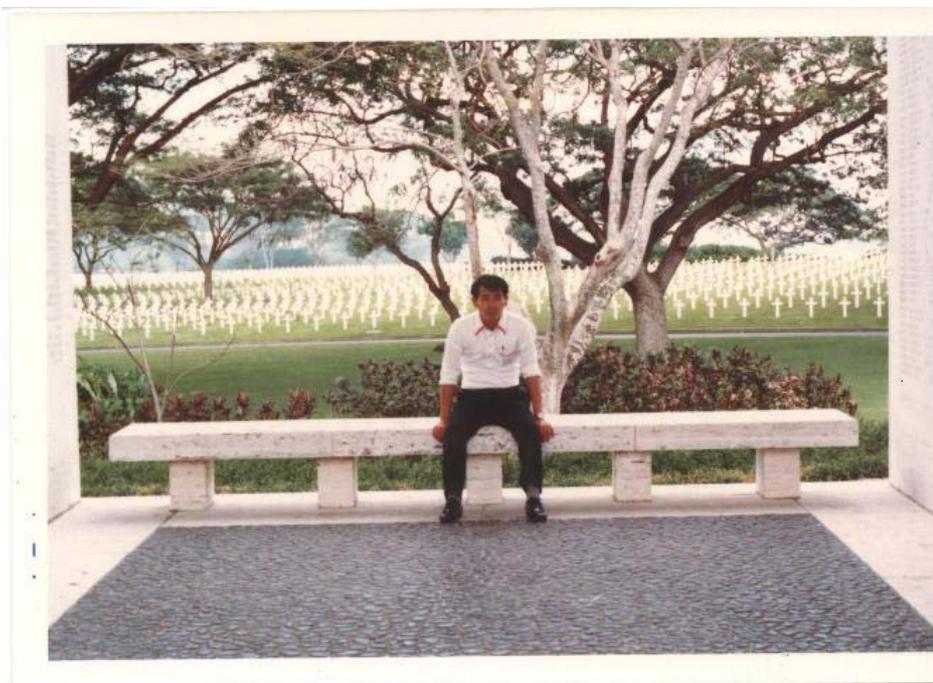
マニラから車で1時間程、南に下ったモンテンルパというところに、太平洋戦争で亡くなられた方の共同墓地がある。

この地名は、古いナツメロにどこか出てくる歌があつたのを聞いたことがある。

辺りな所で、ここの一画に刑務所があり、今もここに処刑場がある。

最初に訪れた時は、まるでホームレスの人が、拾った木で作った程度のものと思えなかつた。

一方、米軍関係や、現地の米軍従軍者の墓は、マニラ郊外にある。(下写真)



白く見えるのは、十字架。

太平洋戦争で亡くなられた米軍や、現地の米軍従軍者の人々もの。

まるで、ゴルフ場に白い十字架を立てたよう……

見渡す限り続いておりその数に圧倒される。

そこに建てられた白い十字架のひとつ、ひとつに秘められた、一人一人の悲しみのドラマがある。

PHILIPPINES 2回目に訪れた時の写真

Philippinesは、南国の無数の島が連なる国、美味しい果物が豊富なところ、チョット危ないが、人なつこく人情の豊かな島、私の父が眠る島、生きておられる主キリストにお出会したところ。

サンパギータの花の国なのである。

教会で行う「皆でフォークソング・クラブ」の秋のミニ・コンサートに「里の秋」をリクエストした。
この詩の3番には……

♪ さよなら、さよなら 椰子の島 お船にゆられて 帰られる
ああ父さんよ ご無事でと 今夜も母さんと 祈ります。

私の父は、帰っては来なかったが……この詩に言い知れぬ郷愁を感じる。

Amazing Grace 白い巨塔の主題歌

Hayley Westenra (当時16歳)

Amazing Grace, how sweet the sound

That saved a wretch like me.

I once was lost, but now I'm found;

Was blind, now I see.

アメイジング・グレース、その美しい響き

私のような墮落した者も救ってくれた

一度道を失った私だけれど、今は神に見出された

目が見えなくなっていた私だけれど、今は見える



私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。

聖書 II コリント 2:15



私の証しー II キリストの導きと救い

はじめに

私の証しー I で述べたように、私は初めての海外旅行で、英語の必要性を認識し少しでも取り組みをしたいと思うようになった。

暫らく1人でやってみたものの、らちがあかないので当時、青葉台で見かけたイングリッシュ・アカデミーという看板をみて、電話で…「ABCからでもよいですか？」と尋ねてみたところそれでもOKとの事だったので社会人向けの英会話クラスへ行くことにした…と言ってもこれしかなかった。

そのご家庭で、感謝祭やクリスマスがあった時、招いて頂いた。

「上流家庭では我々とずいぶん違うことをするんだナ」と思っていた。後になって知った事だがそこは天使教会の赤阪牧師先生のお宅であった。

今、振り返って見ると、不思議なめぐり合せ、つながりがあり、主が既に私を導いて、おられたのではないかと思う。これは主が原作？され私に示された、ストーリーでもある。

ニール先生との出会い

ニール先生は、こうして 始めた英会話クラスへ約3～4年後の先生として迎えた。

彼は赤阪牧師の妹のマリさんと結婚されたアメリカ人でとても話好きな人だった。

その頃は、マンツー・マンでやっていたので、このクラスが終わっても、時々蔵王町方面の24h営業のレストランへ行って、四方山話の“課外授業”をしていた。

当時のコミュニケーションは全て英語でやっていたが、こちらは Vocabulary が限られているから話の主導権はニール先生にあっていつも聞き役だった。

ニール先生は気さくな方で、魚釣りや、ゴルフにも一緒に行ったことがある。

英会話クラス(と言っても生徒は私だけ)で会う度に、ご自分の家庭を犠牲にして私の為、忙しい時間を割いて、無駄とも思えるような努力をされたのである。

先生の話は、奇想天外なストーリーで面白く連続小説のよう... 繰り返し、繰り返し、彼の結婚された時の経緯や今で言う主の導きのあった証等の話をされたので、ストーリーは宙覚えするほどになったが、話し上手なので興味を欠く事はなかった。

MK(※仮名)のこと ※彼は現在既に刑を終え社会に復帰しており個人情報の保護の為。

かなり前に話がさかのぼるが、私の会社でMKという人が働いていた。ウチに来る前はタクシーの運転手をしていたようだ。彼は元来真面目な性格で仕事ぶりは真面目だった。

当時は、いくらでも仕事がある状況だったので機械をフル稼働させる為、2交替制とし、彼もそこに従事するようになった。通常では仕事をしていて時間帯が、変則的勤務に替わったので、自由時間がもてるようになったのかも知れないが、彼はゲーム賭博にのめり込んで、複数のサラ金で借金をしたあげく仕事どころではなくなり、会社を辞めた後一家心中を図るという事件が起きた。

この事件は、当時のサラ金、ゲーム喫茶という社会問題絡みのことだったので、新聞などで大きく報道された。どこで彼の人生が狂ったか定かではないが、ゲーム賭博に手を出して多額の借金を重ねサラ金からTELがかかるようになって、会社に知れ、見かねた社長が、保証人になり銀行の長期で低利の融資を受けサラ金の全額を精算し返済した。

その後、彼は立ち直ったかのように見えたが、ゲーム賭博から足を洗うことが出来ず、一方サラ金においては、借金を戻したことにより、一層の信用を得る結果となって、ますます多額の金を動かすようになり、以前のを、取り戻そうとして、はじめの状態よりもっと悪くなった。

やがて一年も経たない間に、サラ金の自転車操業に奔走するようになり、行き詰まって破綻、家庭崩壊、希望も何もかも閉ざされた彼は思いつめ、奥さんと子供を道連れに、まさに魔が差したとか言いようがない... 悲惨な一家心中を果たした。

しかし、自分だけは死にきれず、殺人容疑で警察に逮捕された。

彼の生い立ち

彼は鳥取県の出身で、生い立ちは決して幸せなものではなかった。

以前に聞いた話によると、母は彼が小学校の2~3年の頃に亡くなってしまった。

石工をしていたという親父は、子供連れの後妻を迎え、彼は多感な少年期を過ごす。

親父はかなりの酒飲みで、これによって内臓を悪くし病死、後妻も逃げるように去ってしまったことから、身寄りが亡くなってしまった。

学校を終えてから集団就職で井原市の繊維会社へ就職、亡くなった彼の奥さんは、四国今治市の出身で同じように、この地に来ていて、別の会社ではあったが、知り合った仲だと言う。

こんなに苦勞して、築き上げた家庭を何故彼は大切にしなかったのだろうか？

彼との引き合わせ

話がニール先生のことへ戻るが、ある日ニール先生がボランティア活動として拘置所の教諭師としておられることを聞いた。私に出来ること!!ニール先生に頼めば.....

「恥ずかしいような話ですが、私の知っている者で.....このような事をして、その拘置所に入っているはずなので、出来れば彼のところへも行って諭してやって欲しい。」

どのように大変なものかということは、考えもせず、お願いをした。

ニール先生は最初渋っておられたが、私のたつての頼みということで承諾して下さいました。

その頃のニール先生は、この活動のために通訳として、マリ夫人をともなつて行かれ、誠に根気強く、献身的に聖書を通した話をされたと言う。

最初は彼自身、自暴自棄になっていて、全く思いもかけない人の出現に、うさんくさそうにして.

「自分のことなど構ってくれるな！」という頑なな態度であったとのことなので、先生の苦闘振りを覗き知る事が出来る。しかし、MKにとっては、自分の親族は一家離散、奥さんの方の親族も、恨みこそあれ、彼を訪ねるような人はいない。寂しさから、彼は徐々に、唯一親身になって、話して下さいましたニール先生の話に関心を傾けるようになった。差し入れた聖書をはじめ、クリスチャン新聞、キリスト教に関する書物等も読むようになった。

手紙

福山地方裁判所は懲役10年の判決を下した。我々の予想より重いような印象を受けたが、検察庁は罪が軽いとして上告。やがて裁判の舞台は広島高等裁判所に移り、彼は広島の拘置所へ身柄を移送された。その後ニール先生は広島へも、訪ねて行かれたことがあるそうだ。

それから彼との間に、手紙のやり取りが始まることになった。

ニール先生は、この手紙を受け取られる度に、“もと依頼主”である私に、それを見せた。

これらの文面から彼の心が洗われ、閉ざされていた心の窓が開かれるようになって行く様子が読み取れた。10回以上に渡る文通は、やがて下る判決を甘んじて受け入れ、これに素直に従うことの決心と改心が書いてあった。

また拘留中、最後の手紙は、私に強いインパクトを与えた次のような事が述べられていた。

主の導き

この手紙によると.

「この拘置所の近くに教会があるようです。

時々耳を済ませると清らかな鐘の音が聞こえてきます。

このような神の国があることを、早く知ってたら. . . 自分ももっと違う人生を歩んでいたかもしれない。もし赦されるなら、自分も主を受け入れたい。」

これは、私の胸の内に衝撃的なものとなった。

このことを振り払おうとしたが、自分にとってますます重みのあるものとなって行った。

彼の魔が差したような人生の岐路は、まかり間違えば、私も落ち込んでいたかも知れないもの。

決して他人事ではない。私も間違ったことをして来た. . 一歩でも踏み外していたら、彼の二の舞を演じていたかも知れない。

その頃の自分は、俗に言うところの『ノム、ウツ、カウ』の3拍子そろったような荒れた思いの生き方をし、私の心にも大きな空洞があった。

当然ながら. . . 当時、私の家庭は、暖かみに欠け、ごたごた続きで、まさに救いがなければ家庭崩壊の直前だった。

他の教会(東福山ルーテル教会)

この事が起きる数年前、私の住んでいる幕山台に、**東福山ルーテル教会** という教会がありそこで、三浦綾子原作の“塩川峠”という映画があった。

私はそれに行かなかったのだが、家内と子供達が見に行ったことがある。

このことから教会の様子が少し判ってきて、どうも外人の先生がおられ英語のクラスがあるという。

子供達を習わせたらどうかとの事になり、教会へお願いに行った。

つまり教会の高い敷居？をまたいだのは、フィリピンのマニラのバンブーオルガンで有名な教会に続き2度目のことになった。

「ミイラ取りがミイラに...？」お父さんも是非、いかがですか？という宣教師の先生の誘いを受け断れなくなってしまって、「それじゃア、ここでもやろうか」という事になって、週1回45分のクラスと15分の聖書の学びをすることになってしまった。

はじめた頃はクラスへ数人の方がおられたが、宣教師の先生が替られたのを境に殆どの方が、来なくなってしまって、私ともう1人だけになってしまった。

1年も経たない間に、この人も来なくなって、とうとう私一人になってしまい、辞めるに辞められなくなってしまった。

その頃は、宗教に全く関心はなかったが、特別伝道集会等があったときは、誘いを受けていたので、顔つなぎに1年に1回お付き合いをする程度であった。先生が替わられて... 単身赴任の老宣教師、ヨッサン先生(Norway)になった時の正月、お国へ帰られず1人で過ごされるとのことから... お気の毒に思い、「我が家で正月を過ごしませんか？」とお声掛けしたところ、気さくに来て下さり、終日我が家で過ごされ、お宮参り??まで付き合ってもらった。

このことがあってから、教会のイベントに少しずつ参加するようになって行った。

メンバーも数人だけのようで、教会のアットホーム的な雰囲気、どこか家族のような感じを受けた。数年経て、教会の方々少しずつ顔見知りになって、徐々に私の意に反して期待され?... 後でこの教会で、洗礼をけるに至る。

救いの手

打ち消そうとしても、振り切れないインパクトが、私の中で強められた。

自分の周りには、いつのまにかクリスチャンの知人が多数おられる。

教会もあり、手の届くところに主がおられる。まさに呼び求める機会が与えられていることに気付いた時、心の中に、初めてキリスト教という宗教に真剣に取り組みをする事になった。

まさに私の背後から、見えない何かが、私を追ってくるような感じがしてならなかった。

私は内心焦りがあり、まさに救いを求めて、飛び込んで行ったという方がふさわしいと思う。

そのころニール先生はアメリカに帰国されていた。

受洗

暗黒の夜中を歩いていて、何か得たいの知れないモノが追って来たとする。

少し灯火が見える方へ無我夢中で逃げ込む... そのような感じだった。

アットホーム的な近くの教会(東福山ルーテル教会)の先生(岡崎牧師)ご夫妻は、私たちを(キリストの愛で?...)とても暖かく包んで下さった。

私には、それは今まで経験したことが無い、とてもすがすがしい、安らぎを感じた。

先生のご指導は、迷った人生でのナビゲーションのようなものだった。

教会の礼拝へ進んで出席するようになり、ゆっくりペースの先生を逆にせきたてるようにして受洗した。後で通り過ぎた人生を振り返って、何故あの時、あんなに迄(キリストを受け入れるよう...)思ったのだろうかと思ふ時がある。

「人生はドラマである」と言うけれど、もしあの時、あの出会いが無かったら... 私は、もがき苦しんでいたに違はなく、あわれな別の人生を歩んでいたであろうと思う。

それ(洗礼を受けて)以来、すこしずつ軌道修正し、私の習慣が変わっていった。

それまで、決まったようにしていた週末の土曜日のマージャンでの朝帰りが、日曜日の礼拝があるので、必然的に出来なくなった。

CSのお手伝いも要請された...このような生活リズムの方がよほど健康的で良いことは子供にでも分かる事だが、情けないことに、大人になるとそれが出来ないのである。

私が洗礼を受けた翌年、長女も洗礼を受け...私の家も少しずつ雪解けのように暖かみが戻って来て、6年遅れて家内も受洗、まがりなりのクリスチャン・ホームに生まれ変わった。

今では、聖歌♪472「人生の海のあらしに」のように、静けき港につき安らいでいるという感じがする。

風の便り

MKは懲役20年の判決を受け、岡山刑務所に服役した。最近、この彼のことで、久しぶりにニール先生(現在埼玉県に赴任)から連絡を頂いた。

この刑務所には、日本イエス・キリスト教団の竹之内牧師が、この刑務所の教唆官として奉仕されておられ、彼のケアを引き継ぎ、担当して下さったとの事。

服役中の間に、洗礼を受けた彼は、良き模範囚として真面目に取り組んできたが、身請けする血縁関係のものが、誰も居ない為、恩赦等の対象から外れガツカリしていた時もあったとのこと。

しかし、その後晴れて刑期を終え出所した。

竹之内先生からニール先生への便りによると、服役期間中、許された課外活動などを通じ、彼は多くの人にキリストを述べ伝え、複数の方が洗礼を受けるに至ったという。

私たちに、こうした彼を受け入れてやれる受け皿があるのだろうか？彼の残りの人生に続いて主が顧みて哀れんで下さるように祈っていかなくてはならない。

あとがき

ずいぶん後である会社を訪問した時、そのトイレで見かけた面白い標語がある...

考えが変わると、行動が変わる。行動が変わると、習慣が変わる。

習慣が変わると、人格が変わる。人格が変わると、人生が変わる。

人生が変わると、運命が変わる。

昔からある...『風が吹けば、桶屋が儲かる』式のものだが、このように一言付ければ、私にぴったりだと思った。【主にあつて】考えが変わると ⇒ ⇒ ⇒ ⇒ 運命が変わる。

私の心の空洞は、主によって修復され、新たな歩みを頂いている。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

死んでしまった者は、罪から解放されているのです。

もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

聖書 ローマ 6:6~8

